ずっと、ずぼんを穿いていた。
裾にフリルがついたものやリボン模様のもの、いかにも女の子用の可愛らしいずぼんは嫌だった。私が穿きたかったのは、そして本当に穿いていたのは、年の離れたふたりのお兄ちゃんのお下がりだった。上のお兄ちゃんの擦り切れた黒いジーンズの半ずぼん（パンクスぽかった）と、下のお兄ちゃんの横に白いラインが二本入っていたジャージ（これはラッパーぽかった）が、特にお気に入りだった。
お母さんは、そんな私を見て笑っていたけれど、一緒に暮らしているおばあちゃんは「嫌な顔」をした（「きらい」と「がっかり」が絶妙な具合で混ざった顔だ、まるで知らない人から急に牛糞をプレゼントされたみたいな）。
「けいちゃんは女の子なんだから、もっと女の子らしくしなさいな。」

おばあちゃんが私にそう言うのは、私とふたりきりのときだけだった。リビングの隣にある、おばあちゃんの和室で。いつも、桃を割ったような甘いにおいがして、日当たりも素晴らしかったけれど、おばあちゃんはこの和室を嫌っていた。
「年寄りだからって、畳が好きだと思わないでほしいわね。」
おばあちゃんはいつも、うんとお洒落していた。胸にレースが綺麗に施された藤色のワンピースや、ぴたりとした夕焼け色のタイトスカートを穿いて、爪を綺麗に塗り、家の中なのに大きなイヤリングをつけていた。どんなに寒くてもずぼんを穿かなかったし、私が穿くような男の子用なんて、なおさらだった。
お母さんは、おばあちゃんとは全然違っていた。いつも大きめのジーンズを穿いて、乱暴にベルトで締めていた。髪の毛を短く切って、おばあちゃんのように爪を整えるどころか、覚えている限り口紅も塗らなかった。煙草を吸いながらコーヒーをすすって、笑うときには奥歯が全部見えるまで口を開けた。お母さんは「はすっぱ」であることを、ほとんど使命にしているみたいに見えた。
私が男の子の恰好をしたがることを、お母さんはすごく喜んだし、上のお兄ちゃんふたりが少しでも「マッチョなこと」（お母さんはそういう言い方をした）をすると

嫌な顔をした。それは、おばあちゃんが私に見せる「嫌な顔」と、そっくり似ていた。急に牛糞をプレゼントされたみたいな、あの顔だ。

「これからは男の子も女の子も関係ないよ。男の子らしくとか、女の子らしくとか、馬鹿らしいじゃん、ねえ！」

おばあちゃんとお母さんは、あまりに正反対だった。毎晩一緒にごはんを食べたけれど、ふたりが目を合わせて話すことはほとんどなかった。お父さんはいなかった。私がまだハイハイをしていた頃に、家を出て行ったのだ。お母さんが写真を全部きれいに捨ててしまったから、私はお父さんの顔を知らなかったし、お母さんにもおばあちゃんにも、「どんな人だった？」とは聞かなかった。

「せめて髪の毛だけは伸ばして。」

おばあちゃんにそう頼まれたから、私の髪の毛は長いままだった。それは私の唯一の「女の子らしさ」だった。おそらくお母さんも、しぶしぶ認めたのだろう。私の髪の毛が、お母さんとおばあちゃんの休戦地帯だったわけだ。

私は肩甲骨まであるその髪を、いつも乱暴にしばっていた。わざとぐちゃぐちゃにしたりもした。お風呂に入った私の髪の毛から死んだ虫が落ちてきたとき、お母さんは手を叩いて笑った。

一緒に遊ぶのは、いつも男の子だった。その中でも私はガキ大将だった。ひとりでも私より優位を示してくると、絶対に許さなかった。私は背が高くて、手足も長かった。バスケットボールを一番遠くまで投げることが出来るのも私だったし、一番高い木に登ることが出来るのも私だった。蝶々を残酷なやり方で殺すこと（羽を砂に埋めて、シーソーで潰すのだ）を始めたのも私だったし、頭のおかしいおじさんを一番辛辣な言葉で罵ることが出来るのも私だった（鳥肌が立つほど気持ちよかった言葉は「クソマック！」だ。自分でもどういう意味か分からなかったけれど）。

男の子たちは私について歩き、私の命令を待った。時々私の女の子らしい長い髪の毛を引っ張る子がいれば、周りの子が泣き出すまでその子を殴った。お母さんはそんな私を見て、やっぱり大声で笑った。

小学校五年生になったとき、おばあちゃんが入院した。

初めは検査入院だった。お腹がなんだかしくしくするの、そう私に言ったときからおばあちゃんは痩せていたけれど、本格的な入院が決まってからは、野菜がしなびて

ゆくみたいに、みるみる細くなった。

お母さんと私は、毎日病院に通った。時々どちらかのお兄ちゃんがついてきたけれど、あまり長くはいなかった。上のお兄ちゃんはラグビーに、下のお兄ちゃんは野球に夢中になっていたから。お母さんはもちろん、ふたりのお兄ちゃんのことを、「嫌な顔」で見た。

おばあちゃんは病室でも口紅を塗っていた。枕元のポーチにはたくさんお化粧品が入っていたし、病室なのにあの甘いにおいがした。耳たぶが痩せてイヤリングが落ちてしまうので、ピアスを開けたいと言っていたけれど、お母さんは聞かなかった。おばあちゃんは落ちてしまったイヤリングをペンダントトップにして、首にかけるようになった。

おばあちゃんが入院したのと同じ頃から、私の胸が急にふくらみ始めた。本当に、急にだ。胸が痛くて仕方なかったし、他の女の子の胸がまだ平らで、私とは全然ちがうことが恥ずかしかった。胸が丸くなるのと同じように、体全体も丸くなった。半ずぼんを穿くと太ももがなんだか生々しくなって、男の子用のTシャツを着ると二の腕にぴたりと貼りついた。

その頃から私は、「可愛い」と言われるようになった。初めは近所のおばさんたちだった。

「けいちゃん、可愛くなったわねぇ！」

それが「子供らしさ」をあらわす言葉ではないということに、しばらくしてから気づいた。気づいた頃には、クラスメイトの私への態度が、少しずつ変わり始めていた。女の子たちは私の髪に触らせてと言って集まり、頼んでいないのにピンクや紫のラメ入りブラシで髪を梳いてくれた。男の子たちとは、無暗に目が合うようになった。そして目が合った男の子たちは、恥ずかしそうに視線を逸らした。昔ひどく殴った男の子ですら、そうだった。

「スカート穿こうかな。」

ある日そう言った私を、お母さんはじっと見た。身構えたけれど、お母さんはあの「嫌な顔」をしなかった。

「おばあちゃんに見せてあげたいんだね？」

スカートは紺色のシンプルなものにした。やっぱりいかにも「女の子用」を穿くこ

とは恥ずかしかったから。
それでも、病院で対面したおばあちゃんは、ものすごく喜んだ。小枝みたいな腕で私を抱きしめ（驚くほど弱々しかった）、疲れて眠ってしまうまで私の髪を梳いた。私の髪の毛は、毎日梳かれるから飴色に輝き、おばあちゃんの甘いにおいをさせるようになった。クラスの女の子たちは、ますます私の髪の毛に夢中になった。
シンプルなものでも、一度スカートを穿くと、男の子用のTシャツは似合わなくなった。スカートに合わせたブラウスを着ると胸が透けるから、スポーツブラをつけた。ブラジャーの線を見られるのが恥ずかしかったから髪の毛はしばらずに、そのまま下ろした。
私はどこからどう見ても「女の子」になった。
おばあちゃんは病室でよく笑うようになった（「嫌な顔」なんて、今までしたことなど一度もなかったみたいに）。体は痩せ続けていたし、お医者さまと話すお母さんの目の下は、日に日にどんよりと黒くなっていったけれど、私を見るおばあちゃんの嬉しそうな顔は、私を誇らしくさせた。
「可愛いわねぇ！」

おばあちゃんは時々、私とお母さんの名前を間違うようになった。
「まきちゃんは、本当に可愛い！」
その年の運動会で、私は徒競走で初めて一位になれなかった。

「可愛いね。」
その人は、出会い頭にそう言った。私は学校から帰る途中だった。
いつもと違う団地沿いの道を、ひとりで歩いていたのはどうしてだったのだろう。
「二位だったよね、かけっこ。」
その人は徒競走をかけっこと言った。子供っぽい言い方だった。でも、子供は私の方で、その人はきっとうんと大人だった。逆光で顔がよく見えなかったけれど、背が高くて頭が禿げていて、髭がぼうぼう生えていた。頭をくるりと回転させても成立するような顔だった。
「可愛いね。」
その日帰った私のスカートを見たお母さんは、すぐに警察に連絡した。
私は裸にされ、全身をくまなく調べられ、ごぼうみたいにゴシゴシ洗われた。私の

スカートには、男のアレ（お母さんはそういう言い方をした）が、何かの徴（しるし）みたいにべっとりついていたのだった。

お母さんは、私を乱暴に洗いながら、時々こう叫んだ。

「ほらね！」

私はお母さんにされるまま、じっと静かにしていた。痛いからゴシゴシこすらないで、とは言えなかった。私の肌は、数日の間ずっとひりひりしていた。

学校で全校集会が開かれた。お母さんは私に起こったことを黙っておけるような人ではなかった。先生は「この学校の生徒が」という言い方をしたけれど、いつの間にか私の話はみんなに伝わっていた。運動会に気味の悪い男がいたことや、団地のそばで頭のおかしなおじさんがうろついていること、そんなことを大声で話しながら、みんな私を慰めた。

「可哀想に！」

男は捕まらなかった。

私はまた、ずぼんを穿くようになった。お母さんにそう言われたから。

「男をおかしな気持ちにさせちゃだめ。」

あのスカートは捨てた。捨てたというより、燃やされた。お母さんが庭で、ごみと一緒に燃やしたのだ。

もうお兄ちゃんのお下がりのずぼんは入らなかった。パンクス風ジーンズも、ラッパー風ジャージも、お母さんが燃やした。上のお兄ちゃんはラグビーに集中するために家を出て寮暮らしを始めていたし、下のお兄ちゃんは野球をやめていたけれど、髪の毛を金色に染めて、ほとんど家に帰ってこなかった。お母さんはふたりが置いていったあらゆるものを燃やし始めた。

「置いていったってことは、いらないものってことだよ！」

お母さんは「燃やす」という行為に夢中になった。いらないものを残らず灰にすることに、すっかりとりつかれてしまった。

毎日学校から帰ると、庭から煙が上がっているのが見えた。それはお母さんが怒っている証拠だった。あの日から、お母さんはずっと怒っていた。ずっとずっと怒っていた。私に起こったことにだろうし、男が捕まらなかったことにだろうし、でもそれだけではなく、とにかくあらゆることに、お母さんは怒っているように見えた。

ある日庭を見ると、お母さんはまだ生きているおばあちゃんの服すら、燃やしてい

た。家の中はどんどん綺麗になった。
私のクローゼットには、新しいずぼんが並んでいた。太いデニム、カーキのカーゴパンツ。おばあちゃんは私に起こったことを知らなかった。その頃には、病室に行っても、おばあちゃんは私が誰だかほとんど分からなくなっていたから。

裏のおじさんのことを見るようになったのは、彼が燃やしていたからだ。授業中、窓の外に立ち上る煙を見てどきっとしたのは、教室できっと私だけだった。煙の出どころを辿ると用務員のおじさんがいて、焼却炉で何かを燃やしていた。
おじさんの名前は、誰も知らなかった。生徒たちから「裏のおじさん」と呼ばれていたけれど、おじさんはほとんどおじいさんに見えた。
裏のおじさんは、大体中庭にいた（中庭なのに、どうして裏と言われるのだろう）。花壇の手入れをしたり、うさぎの世話をする人のはずだったけれど、いつも大抵焼却炉にいた。プリントや使えなくなった木の椅子。数年放置されていた忘れ物の服や落ち葉。枯れ、腐ってしまったヘチマのツル。おじさんはなんでも燃やした。どうして私が今までその煙に気づかなかったのか不思議なくらいだった。煙は私たちのいる三

階まで、やすやすと届いていたのに。
私はおじさんの姿を、いつも窓から眺めた。窓際の席だったのが幸いだった。授業中ぼんやりするようになった私を、先生もクラスメイトも咎めなかった。私は相変わらず「可哀想な子」だった。「　」の中にいる私は静かだったし、その中にいる限り安全だった。みんな、労わりの目を向ける以外は、ほとんど私を放っておいてくれた。「　」の力は絶大だった。
時々、まるで自分が透明なガラスのケースに入っているような気持ちになった。それってすごくありきたりな感想だけど、本当にそうだったのだから仕方がない。水の中にいるときみたいに、みんなの声が遠くから聞こえた。女の子も男の子も、私と目が合うとそれぞれのやり方でそらした。男の子は大抵真っ赤になった。
私はうんと痩せてしまっていた。それでも胸は小さくならなかった。同じ年の女の子に比べて、私はきっと大人びて見えた。
毎日窓から、おじさんを見た。
おじさんはいつも何かを燃やしていた。よくそんなに燃やすものがあるなぁと感心するくらい、おじさんは色々なものを燃やした。

私はおじさんの手管に夢中になった。あれは無理だ、あれはきっと燃えないにちがいない、そう思うようなものでも、おじさんの手にかかれば綺麗に煙になった。

燃やすということに関してはお母さんとまったく同じことをしているのに、おじさんのそれはお母さんとは違って見えた。お母さんが、何かを罰するように燃やすのだとすれば、裏のおじさんは、何かを慰めるようなやり方で燃やした。

焼却炉は大きな口をした化け物みたいだった。おじさんはその化け物を手なずけ、優しく生贄を与えている猛獣使いだった。

上から見ているだけでは足りなくなって、ある日中庭に降りてみた。焼却炉の後ろにある花壇に座って、私はじっとおじさんを見た。だからといって、話しかけはしなかった。話すことなんてなかったし、おじさんのやり方を見ているだけで、十分だったから。

おじさんは、私を見なかった。時々、そばに置いてある折り畳み式の椅子に座って煙草を吸うのだけど（おじさんは煙草に火をつけるのも、焼却炉を使った。火傷してしまうのではないかと、いつもハラハラしたけれど、おじさんが煙草を焼却炉に近づけると、魔法みたいに小さな火がつくのだった）、そんなときでも、私を見なかった。

こんなに私を見ない人は初めてだった。

最後には目を逸らしたとしても、みんな一度は私を見た。驚いたように目を見はる大人もいれば、優しく笑ってくれる女の子もいれば、瞳を濡らして見つめる男の子もいた。でもおじさんは、私を見なかった。

私に気づいていなかったわけではないだろう。私は時々煙にむせて咳をしたし、夕方の光が私の影をおじさんの足元まで伸ばしたりもした。

おじさんが私を見ないのは、他の大人の男の人がそうするのとは違うと、私は思っていた。あの事件があってから、大人の男の人は、小学生の女の子に話しかけなくなった。男はまだ捕まっていなかったし、少しでも長く女の子を見て大声をあげられたらたまらない、と思っていたのかもしれない。大人の男の人は、私たちを見ると逃げた。

でもおじさんが私を見ないのは、そういう理由からではないだろう。話したことはなかったけれど、裏のおじさんがそんな臆病な大人ではないと、私はほとんど確信していた。

だからある日おじさんがこう言ったとき、私は驚かなかった。

「何か燃やしたいものはないですか？」
私を見ないでそう言ったけれど、私に言ったのは間違いがなかった。中庭にはおじさんと私以外いなかった。私はとうとう、授業中も堂々と教室を出てゆくようになっていた。気分が悪い、と言うと、先生はすぐに保健室行きを許可してくれたし、そのまま私が保健室に行かず中庭にいるのを知っても、何も言わなかった。生徒たちになんて言っていたのか分からなかったけれど、自分でそうしておいて、私はそれって問題なんじゃないかと思っていた。
「燃やす？」
私が聞くと、
「はい、何か燃やしたいものはないですか？」
おじさんは丁寧に繰り返した。授業に出なくていいのか、というようなことを言わないのが良かったし、天気がいいね、という馬鹿みたいなことも言わないのはもっと良かった。おじさんははっきり、私に用があるか聞いているのだった。大人と同等に扱われた気がした（きちんと敬語で話してくれることも嬉しかった）。
「燃やしたいものですか。」

「ええ。」
おじさんは素っ気なかった。でも、その素っ気なさは私をひとりぼっちにしなかった。
私はポケットに手を突っ込んで、くちゃくちゃに固まってくるみほどの大きさになったティッシュペーパーを取り出した。ちっぽけなのが恥ずかしかった。でも、おじさんが小さくうなずいてくれたから、勇気が出た。
「これですか。分かりました。」
そのとき初めておじさんの顔をはっきり見た。おじさんは大きな目をしていた。ぎょろり、という形容がぴったりだったけれど、全然怖くなかった。おじさんの顔には、深い皺が縦横無尽に走っていた。
おじさんは小さなティッシュペーパーを、丁寧に焼却炉の中に入れた。小さいからって、ぽんとほうり込んだりしなかった。私のティッシュペーパーは、きっと今までどんなティッシュペーパーも経験したことがないくらい、丁寧に燃やされたのだった。
それから私は、毎日おじさんに何か燃やしてもらうようになった。

給食で残したパン（「もったいない」みたいなことを言わないのも良かった）、習字の失敗作（「友達」という字）、ちぎれたヘアゴム（ランドセルの底で見つかった）。おじさんが毎日燃やしているものに比べたら、本当にちゃちなものばかりだったけれど、おじさんは絶対に私を馬鹿にしなかった。私が行くと、いつも初めて会ったときのように、

「何か燃やしたいものはないですか？」

そう聞いてくれた。決して「今日も来たのか」みたいな軽口は叩かなかった。燃やすということにかけて、おじさんはプロフェッショナルなのだった。

おじさんが「例の事件」のことを知っているのかどうかは関係がなかった。大切なのは、おじさんが私のことを「可哀想な子」という「　」に入れなかったことだった。おじさんは私に対して、ただ、毎日燃やすものを持ってくる人間として、礼節をもって接してくれた。私も礼儀正しく接した。無駄な話はしなかったし、燃えるかどうかを卑屈に判断したりもしなかった。燃やすことに関しては、おじさんに任せておけば間違いがないのだった。

「何か燃やしたいものはないですか？」

裏のおじさんのところに行くようになってから、初めて雨が降った。

おじさんはもちろん、そんなことで燃やすことをやめる人ではなかった。黒い雨合羽（あまがっぱ）を着て、焼却炉の炎を絶対に絶やさなかった。

私は傘を差していた。雨合羽は小さな子供が着るものだと思っていたけれど、おじさんが着るとそれはうんと恰好よかった。傘を差している自分が、臆病で子供っぽい（実際子供なのだけど）人間に思えた。

「何か燃やしたいものはないですか？」

その日私は、燃やしたいものを何も持たずにここに来ていた。雨が降ったことで、緊張がほどけてしまったのかもしれなかった。

ここには、燃やすものがなくても来ていいはずだった。でも、そのときの私は、燃やすものもないのにやって来たことを恥ずかしいと思った。プロフェッショナルのおじさんに対して、ひどく失礼なことをしてしまったような気がしたのだ。

「ごめんなさい。」

謝った私を、おじさんはじっと見た。おじさんの顔は、やっぱり皺だらけだった。

「燃やすものがないのです。」
「そうですか。」
おじさんはそのまま、私を見ていた。大人にこんなに長く見られるのは、ずいぶん久しぶりのことだった。
「謝らないでください。」
おじさんはそう言った。
「燃やすものがないのに、どうして無理に燃やす必要があるでしょうか。」
おじさんはくるりと背を向けて、作業に戻った。戻ってからは、私なんてはじめからいなかったみたいに、燃やすことに集中していた。
おじさんのかぶったフードに、雨粒が当たっていた。私の小さな傘にも。
雨音がした。雨が傘に、そして地面に当たる音は、だんだん、だんだん大きくなった。
「言葉を。」
私がそう言うと、おじさんは作業の手を止めた。私はおじさんに、もっと見てほしいと思った。私のことを、もっとはっきり見てほしかった。私のその思いは叶えられた。おじさんはゆっくり振り返った。
「言葉を燃やすことは出来ますか。」
おじさんはしばらく考えていた。不思議そうな顔も、軽蔑するような顔もしなかったし、もちろんあの「嫌な顔」もしなかった。
「言葉を、ですか。」
「はい。言葉を燃やすことは出来ますか。」
おじさんの返事は待たなかった。私はおじさんが何か言う前に、こう言った。
「ほらね。」
その途端、私の足の間が冷たくなった。雨のせいではなかった。雨が降っていても、焼却炉の周りはとてもあたたかかったから。
「ほらねを、燃やすことは出来ますか。私、スカートを穿いて。でも、おかしな人に会って。可愛いねって。それで、お母さんが。」
そこまで言って、私は黙った。お母さんのことを言うのは、フェアじゃないと思ったのだったし、それ以上言うと、泣いてしまいそうだったから。
「残念ながら、言葉は燃やすことは出来ません。」

おじさんはそう言った。フードのふちから雨粒がぽたぽた落ちていた。
「かたちがないものは、燃やすことが出来ないんです。」
おじさんは私より悲しんでいるように見えた。かたちのないものを燃やすことが出来ないことに、私よりうんとうんと昔から、ずっと悲しんでいたみたいに見えた。
「そうですか。」
雨と煙に囲まれて、おじさんの姿はぐにゃりと歪んだ。
「本当に燃やしたいものを、」
おじさんはそう言うと、コホンと咳をした。
「燃やすことが出来なくてすみません。」
おじさんはその言葉で、プロフェッショナルの枠から、少しだけこちらにはみ出してくれた。余計なことを言わないこと、軽口を叩かないことにかけては、おじさんの右に出る者はいなかったはずなのに。
「燃やしたいもの。」
私のほうが、汗をかいていた。おでこ、鼻の頭、脇の下、股の間。
「はい。お役に立てなくて、すみません。」

汗が止まらなかった。私はお母さんのことを思い出していた。怒りののろしを上げて、あらゆるものを燃やしているお母さんの姿を。
「お母さんは。」
私の心臓はどきどきいった。前髪がぐっしょり濡れた。
「きっと、私が悪いって。」
握った私の手の中には、お母さんの「ほらね」があった。かたちはないのにすごく冷たくて、私の掌が少し震えた。
ほらね。
私は分かっていた。お母さんが言うそれが、どういうことなのか。
おばあちゃんに見せるためだと言い訳をして、本当は私は、可愛くなりたかった。スカートを穿きたかった。私はそれを可愛いと思ったし、みんなが私を可愛いと思うことが嬉しかった。
ほらね。
あの日、お母さんの願いに反して女の子らしくなったこと、可愛いと言われて喜んだことへのバチが当たったのだと、私は思っていた。私の可愛いスカートが「男の何

か」で汚れてしまったことは、私のせいなんだって。全部、私が悪いんだって。
「私が悪いから。」
おじさんにこんなことを言うのが恥ずかしかった。おじさんには、プロフェッショナルでいてほしかった。私なんか無視して、ただ炎だけを相手にしていてほしかった。でもおじさんには、どうしようもなく私を見てほしいのだった。
「あなたは悪くない。」
おじさんが言った。
おじさんの声は、今まで聞いた中で一番乾いていた。乾いて、強くて、あたたかかった。まるっきり炎みたいだった。もちろん雨なんて、ものともしなかった。
「あなたは悪くないんです。」
私の目から、だらだらと何かが流れていたけれど、それはきっと涙ではなかった。涙よりもっと粘り気があって、すごくにおった。とにかく私は、絶対に泣いていなかった。
「私は、」
私はスカートを穿きたかった。スカートは可愛かった。スカートを穿いた私は可愛

かった。可愛いと思われていることが、嬉しかった。そうしたら、あんなことが起こった。あの人は私のことを「可愛い」と言った。それですら嬉しかった。そうだ私は、嬉しかった。可愛いと言われて嬉しかった。でも、私は。
「あなたは悪くない。」
私は、悪くなかった。
可愛くありたいと思うことは、悪くなかった。可愛いと言われて嬉しかったことは、悪くなかった。
私が可愛いことは、悪くなかった。
「あなたは、悪くないんです。絶対に。分かりますか。」
「はい。」
本当は、きちんと分かっていなかった。おじさんがどうしてそんなに強く断言出来るのか。「絶対に」なんて言えるのか。でもおじさんの言葉は、私の体をあたためた。それが大切だった。
「私は、悪くない。」
そう言うと、私の掌もあたたかくなった。「ほらね」は多分、なくなっていなかっ

たけれど、ずっとそこにあったけれど、でももう震えることはなかった。
「私は悪くない。」
おじさんはまたひとつ咳をすると、くるりとうしろを向いた。
背中だけで、おじさんが恥じているのが分かった。たったこれっぽっちの会話でも、おじさんからすれば、とんでもないお喋りなのだ。
おじさんは、今までの分を取り戻すように、熱心に燃やした。長く花壇に放っておかれてぺたんこになった紅白帽、何に使っていたのかちっとも分からない木の板、百葉箱の中で死んでいた蜂。
私はそれを、いつまでも見ていた。雨は止まなかったけれど、私の体はずっとあたたかかった。
だって、私は悪くないのだから。

おばあちゃんが死んだのは、その夜のことだった。
死んだおばあちゃんは燃やされた。その煙を見ながらお母さんは、みんなが驚くくらい、大きな声で泣いた。お母さんが泣いたのを見たのも初めてだったし、お母さんがおばあちゃんのことを「ママ」と呼ぶことも、私はそのとき初めて知った。